



山本美香さん、都留市市民栄誉賞受賞

10月4日、都の杜うぐいすホールにおいて「美香さんのメッセージを未来へ～故 山本美香さんを偲ぶ会～」が開催され、その前段で都留市市民栄誉賞の授与式を執りおこないました。

この市民栄誉賞は、市民または市にゆかりの深い個人もしくは団体で、学術、文化、芸術、スポーツなどの分野において輝かしい業績を上げたことにより広く市民に敬愛され、かつ、市民に希望と活力を与えたと認められる功績の顕著なものに対して授与するものです。

市では、山本美香さんのその多大なる功績を未永く顕彰することを目的とし、第1号受賞者として選定しました。式典当日は、受賞した山本美香さんのお父様とお母様が賞状と記念品を受け取りました。会場には非常に多くの方々が来場し、美香さんの功績をたたえました。



■山本美香さん功績概要
山本美香さんは、世界の紛争地域から戦禍の惨状や住民の暮らしを伝えるとともに、その体験を基に市内をはじめとする大学、高等学校、中学校などで平和に対する考え方を講演しました。

特に、戦地における女性や子どもなど、立場の弱い住民の暮らしに着目して反戦平和活動を長年に渡り続けてきた世界平和に対する貢献は大きく、その強い責任感と使命感あふれる行動は、広く市民に敬愛され、かつ、市民に希望と活力を与えたものであり市民の誇りでもあります。また、事業仕分けの仕分け人として本市の行財政改革や、本市ゆかりの著名人などで組織する「桂山会」の会員として市政に寄与するなど、様々な分野で本市に貢献しました。



■(上) 都留市長より、都留市市民栄誉賞の賞状を受け取る山本孝治さん。また、記念品はお母様の山本和子さんに手渡されました。

■(下) 受賞後、ご挨拶をする山本孝治さんと夫妻。

「平和な世界は、たゆまぬ努力をつづけなければ、あつという間に失われてしまいます。私たち大人は、平和な社会を維持し、できるだけ広げていけるように道をつくります。」

そして、これから先、平和な国づくりを実行していくのは、いま十代のみんなです。

世界は戦争ばかり、と悲観している時間はありません。

この瞬間にもまたひとつ、またふたつ……大切な命がうばわれているかもしれない――目をつぶってそんなことを想像してみてください。

さあ、みんなの出番です。」

山本美香著『戦争取材する』より一部抜粋

美香さんのメッセージを未来へ
～故 山本美香さんを偲ぶ会～



「美香さんのメッセージを未来へ～故 山本美香さんを偲ぶ会～」における、関係者の言葉

小・中・高校時代の同級生
奥脇弥生さん

「美香ちゃんは、小学生の頃から文章表現がとて上手な子でした。美香ちゃんの撮影した最後の映像は途中で途切れていましたが、その続きは、私たちが自身が平和で笑顔あふれる世界の映像を撮影して行かなければならないと思っています。美香ちゃんにも笑顔で見守ってほしいと思います。」

大学時代の同級生
増田 亮さん

「初めて美香ちゃんと出会った時、彼女は不思議なくらいキラキラしていて、印象に残っています。いつも『増田君、どう思う？増田君ならどうするの？』と問い、私の話をたくさん聞いてくれました。彼女が報道の世界に入ったと聞いた時には驚きましたが、今思えば納得がいく部分があります。強い正義感や透明感を持った彼女は、私たち仲間への誇りです。」

シンクタンク構想日本
加藤葵樹さん・伊藤 伸さん

「山本美香さんと仕事をして強く感じたのは、なんと言ってもその『現場感』。現場に行った人を見て、経験したもののほど強いメッセージはありません。山本さんのジャーナリストとしての経験と観点が事業仕分けにも十分に発揮されていました。」

ジャパンプレス代表
佐藤和孝さん

「彼女はいつも全力でした。仕事も人生も、いちずな人でした。笑顔も怒った顔も、彼女のまっすぐな視線もまぶしかった。まるで少女のようでした。彼女のジャーナリストとしての転機はイラク戦争だったと思います。泊まり込みで取材していた時、激しい爆音がしました。隣の部屋のジャーナリストの部屋が米軍に砲撃され、大破したのです。2人でカメラをもって飛び込むと、部屋が煙っており、中で人が血だるまになって床に倒れていました。彼女は叫び、涙を流しました。当然恐怖もあったと思います。彼女は涙ながらに、『ちくしょう』と言いました。この戦争の理不尽さ、ジャーナリストだけでなく、女性や子どもといった弱者が殺され、傷ついていく。真実を伝えるという覚悟がその時、彼女に生まれたのではないかと思います。彼女の志を残すことが僕のこれから一番やらなければならぬ仕事だと思っています。報道で世界を変えられるとか、戦争を止められるということは、大人が聞けばおかしい言葉です。しかし、彼女は真剣にそう思っていました。それは、正しいことです。その正しさに触れた僕は幸せでした。ただ、彼女と同じ風景を見て、光を感じ、空気を吸うことはもうできない。「山本美香をずっと残してやりたい。そう思い、私は財団を立ち上げた」と考えています。もう一度言います。彼女と出会えて幸せでした。」